

国立国会図書館



楽譜の風景 — 音楽の明治・大正・昭和 —

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）

東日本大震災の記録をのこす意志、つたえる努力

東日本大震災アーカイブ公開記念シンポジウム

2013.7/8
No.
628/629

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の閉室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

CONTENTS

02 ハルモニウム・ストラ インド音楽、西洋楽器に出会う

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 楽譜の風景 — 音楽の明治・大正・昭和 —

16 新しい統合検索サービス

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ (ひなぎく)

20 東日本大震災の記録をのこす意志、つたえる努力

東日本大震災アーカイブ公開記念シンポジウム

15 館内スコープ

音と映像の記録を伝えるために

26 本屋にない本

○「SPレコードレーベルに見る日蓄 — 日本コロムビアの歴史」

27 NDL NEWS

- 韓国国立中央図書館との第16回業務交流
- 「国立国会図書館の資料デジタル化に係る基本方針」の策定
- おもな人事
- 法規の制定

29 お知らせ

- デジタル化資料の図書館等への送信に関する説明会
- 国立国会図書館データベースフォーラム (関西館)
- 平成25年度「児童文学連続講座 — 国際子ども図書館所蔵資料を使って」
- 国際子ども図書館講演会「那須正幹さんに聞く — ズッコケ三人組からのメッセージ」
- 国際子ども図書館展示会「世界をつなぐ子どもの本 — 2012年国際アンデルセン賞・IBBYオーナーリスト受賞図書展」
- 関西館小展示 (第14回)「東南アジア世界遺産の旅」
- 「戦略的目標」を策定しました
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

ハルモニウム・ストラ インド音楽、西洋楽器に出会う

林 瞬介

インドの民族音楽の演奏に、オルガンのような白黒の鍵盤を持ち、似た音色を響かせる楽器が使われることがある。

この楽器の名前はハルモニウムという。どことなくインドらしからぬ(?) 語感から想像できるように、もともとはフランス生まれの西洋楽器である。西洋由来の楽器を伝統音楽にはほとんど用いない日本人には奇妙に感じられるが、インド人にとってハルモニウムは伝統音楽のために一般的に用いる楽器である。

本来、ハルモニウムは足踏み式のふいごで内部に空気を送り込み、風圧で金属製のリードを震わせて音を奏でる仕組みの大型の鍵盤楽器で、日本でも一昔前まで学校や家庭に広く普及していたオルガンとは兄弟関係にある。

インドのハルモニウムは、西洋のものから小型化され、送風機構が手こぎ式のふいごに変更されている。演奏者はあぐらを組んで座り、床に置いたハルモニウムの背面のふいごを片手で操りながら、もう片方の手で鍵盤を弾く。

音色を調整するための機構であるストップにもインド独自の工夫がこらされている。インド音楽では主旋律の演奏中にドローンという持続して鳴らされる基音をタンブーラ、シタールなどの楽器で奏でるが、ハルモニウムにはドローン専用のストップが備えられており、鍵盤で主旋律を弾きながら同時にドローンも鳴らすことができる。

こうしてインド音楽向けに改良を施されたハルモニウムは、20世紀初頭に広く定着したと言われている。

ここで紹介するのは、ハルモニウムがインド国内で生産されるよりずっと前、1874年にベンガル地方の中心都市コルカタで出版されたハルモニウムの教則本である。

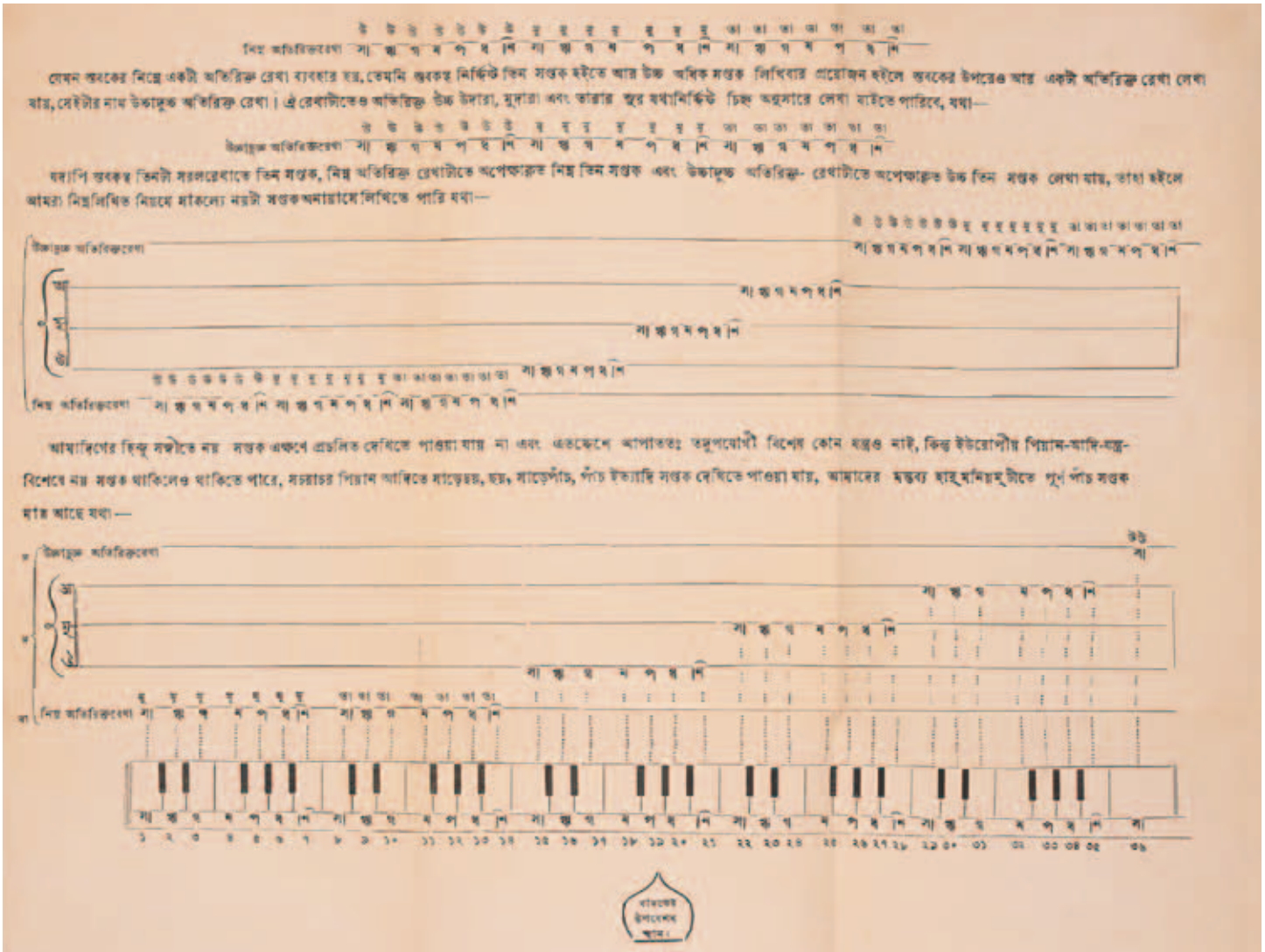
著者はスリンドロ・モーハン・タゴール。アジア人初のノーベル賞受賞者として名高いラビーンドラナート・タゴールと始祖を同じくする名門に生まれた彼は、生涯をかけてインド音楽の保護に力を尽くし、本書を含む多くの音楽書を出版した。1870年代には、インド音楽の楽器や音楽書を世界中の図書館や博物館に寄贈したことが知られる。

本書においてタゴールは、ベンガル地方の言葉であるベンガル語を用いて、西洋から伝来した足踏み式のハルモニウムについて解説し、この西洋楽器を使ってインドの伝統音楽を演奏する方法を提案している。

タゴールは、別の英語の著作において、サンスクリット語の古典音楽書に基づき、インド音楽はシュルティと呼ばれる22の精緻で微細な音程の理論があり、西洋音楽の五線譜を用いて記譜すべきではないと主張していた。その彼が、1オクターブが7個の白鍵と5個の黒鍵による12半音でしか表現できない鍵盤楽器のハルモニウムをインド音楽に用いようとしていたという事実は大変興味深い。

さらに驚かされるのは最新の西洋楽器をインド音楽に適合させるという一見大胆な試みが非常に早くから行われたことだ。実は、ハルモニウムの特許がフランスで取得されたのは1842年で、西洋諸国に普及したのは19世紀の後半に入ってからである。それからほんの20年で、インド人音楽家自身の手でインド音楽への導入が試みられたわけだ。

本書は80ページ足らずの小冊子だが、インド音楽という伝統に西洋楽器という異文化が持ち込まれた際に、伝統側が示した柔軟な対応の一例を伝える貴重な証人である。(はやし しゅんすけ 調査及び立法考査局議会官庁資料課)



上 写真1 鍵盤の弾き方 (折込)

写真2 ベンガル語標題紙

写真3 英語標題紙

下 写真4 ハルモニウム
 (東京藝術大学小泉文夫記念資料室蔵)
 右 写真5 20世紀前半の演奏の様子。
 中央に独唱者が座り、左右に伴奏の
 ヴィーナ、ドローンを奏でるタンブ
 ラ、リズムを刻む打楽器が並ぶ。ハル
 モニウムはこのうちの伴奏とドロ
 ーンを一台でこなすことができる。
 出典: *The music of India*. 2d ed.
 Calcutta: Y.M.C.A. Pub. House, 1950.



参考文献

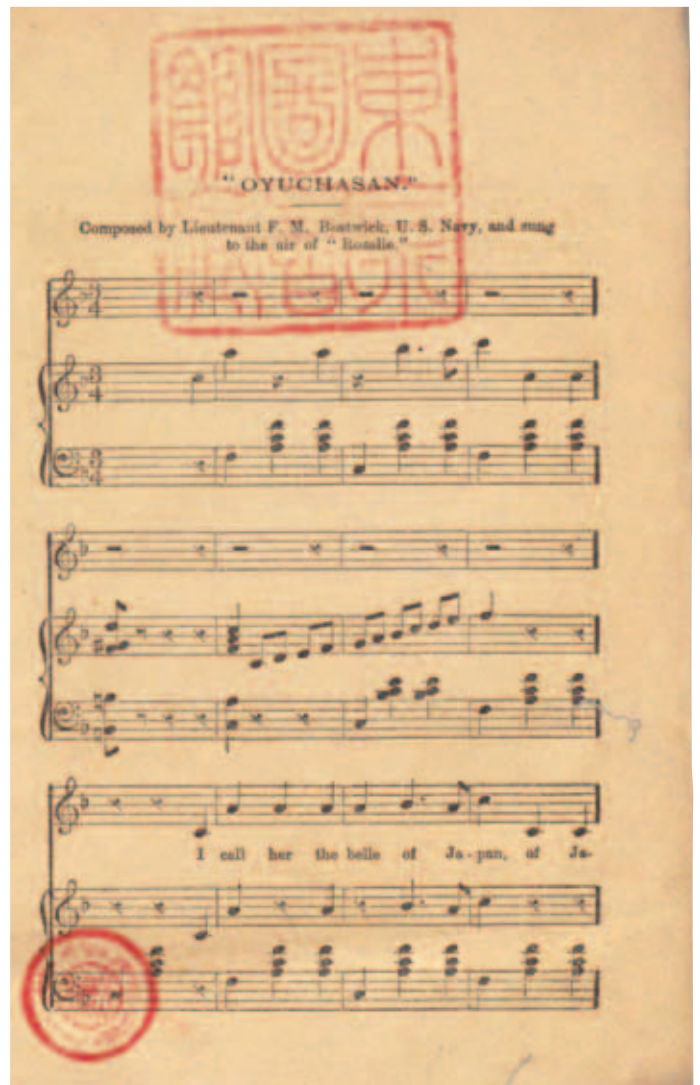
- 井上貴子『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』青弓社 2006.2
- 岡田恵美「コルカタのハルモニウム産業にみる都市性」『東京藝術大学音楽学部紀要』(36) 2011.3 pp.21-36
- 田中多佳子「インド音楽の世界－楽器に見る人々の『こだわり』」鈴木正崇編『南アジアの文化と社会を読み解く』慶應義塾大学東アジア研究所 2011.11 pp.147-191
- 塚原康子「明治10年S.M. タゴールが日本に寄贈したインド楽器と音楽書」藤井知昭、岩井正浩編『音の万華鏡：音楽学論叢』

- 岩田書院 2010.7 pp.305-326
- 姫野翠「インド音楽における西洋音楽の楽器－楽器の文化変容の一例として」『作陽音楽大学・作陽短期大学研究紀要』13 (1・2) 1981.5 pp.270-262

Ṭhākura, Śaurīndramohana.
 Hārmaniyam-sūtra : hārmaniyam, śikshā, bidhāyaka, grantha.
 Kalikātā : Śaurīndramohana Ṭhākura, 1874. 79p. ; 24cm.
 <請求記号 Y753-TS-25 > ※ 関西館所蔵



1



2

楽譜の風景 — 音楽の明治・大正・昭和 —

林淑姫

1. はじめに

うたは世につれ、という。うたに限らず音楽はいつも時代とともにある。時代は音楽を生み音楽は時代を映す。音楽にも年齢がある。平成生まれもあれば明治生まれもある。明治に生ま

れた音楽が今も息づいているのはその作品の生命力ばかりでなく、楽譜という記録媒体によって残されてきたから、という自明のことを時々私たちは思い返す必要がある。瀧廉太郎 (1879-1903) の「荒城の月」も納所弁次郎 (1865-1936) 「兎と亀」も山田耕筰 (1886-1965)

写真1~2 Oyuchasan / composed by lieutenant F.M. Bostwick, U.S. Navy, and sung to the air of "Rosalie." Tokyo : The Kobunsha, 1890. 1 v. ; 19 cm. <請求記号 W174-B2>
 写真1 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1901736> (カラー) 1コマ目 表紙。
 写真2 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1901736> (カラー) 2コマ目 楽譜の最初のページ。

の「赤とんぼ」も、明治以降に生れた音楽はすべて作曲者によって楽譜に記され、その楽譜を刊行する出版社があって伝えられてきた。だから逆にいえば、出版が経営上ワリにあわない、つまり不特定多数の購買者が見込めない専門的な楽譜、たとえばオーケストラやオペラの大型総譜などは出版が見送られ草稿として関係者の手許に残るのみ、という陰の部分が仄見えてくる。そうした事情も含めて日本の楽譜出版の実態が明らかにされる必要がある。

日本音楽学会が文化庁の委託を受け、3次にわたって進めてきた「日本の音楽資料」調査は、最終的には1945年以前の国内版出版楽譜（洋楽楽譜）の実態解明に的を絞って行われた。日本全国の図書館、資料館等が所蔵する当該出版楽譜の調査であり、データ作りである。アンケート回答を基本として実施された調査の概要は本年3月「報告書」としてまとめられたが、端的に数字で示せば、全国170機関から寄せられた資料総数19,400点、書誌タイトル数9,200件を得た。書誌数の時代別内訳は、明治期以前9件（1605年刊行のキリシタン版『サカラメンタ提要』1件、幕末維新期の軍楽用鼓譜・鼓笛譜8件）、明治期1,800件、大正期2,300件、昭和前期5,000件である。実態にどれだけ迫り得たかについて俄に判定することはできないが、史上初の楽譜調査としては相応の成果を得たと思う。

この調査期間中、国立国会図書館には大変お世話になった。国立国会図書館が所蔵する国内出版の楽譜（洋楽楽譜）は2,000点を超える。音楽資料にとってもやはり宝庫だった。珍しい資料も発掘され、従来の認識を改める機会にもなった。それらの幾つかを紹介しつつ、近代日本の音楽と出版楽譜について述べてみたい。

2. 近代日本と西洋音楽

開国から維新へと続く動乱期を経て樹立された明治政府は、近代国家にふさわしい新たな国造りを使命とした。近代＝西洋＝進歩という図式のもとでの「近代国家」であったから、「進歩」のためには国家の制度も社会も教育も文化も、一切合切西洋風に革新されなければならないと考えられた。国字でさえローマ字を公用とすることが論議されたぐらいである。そうした風潮の中で、新しい日本の音楽（国楽）創成を意識したとき採られた論法は、全面的欧化と欧化排除の二説をあげた上とともに極論として退け、その間をとって「東西二洋ノ音楽ヲ折衷」するという文字通りの折衷論である。人々は西洋近代に普遍性を認め、その方法を採用して新しい社会を創建することを目指し、その延長線上で日本固有の文化を「改良」すること、それが「進歩」であり、後進国日本を世界に参入させる途であることに疑いをもたなかった。

当時の知識人が西洋音楽に認めた最大の利点は「楽譜」である。記憶に頼る師弟口伝の伝承が一般的であった日本の音楽にも楽譜がなかったわけではない。しかしその場合にも雅楽は雅楽譜、琵琶は琵琶譜というようにそれぞれ固有の記譜法による楽譜であり、西洋音楽の五線譜のようにどのジャンルにも共通する楽譜ではない。末松謙澄^{すえまつけんしょう}（1855-1920）がロンドンから送った「歌楽論」¹に、西洋音楽の「進歩ハ首トシテ楽譜ノ編集アリテ」と感嘆して記したのはこの共通の譜—五線譜である。五線譜は「普通の記譜法」でもあって世界の音楽のすべてに適用可能と考えられた。

日本近代の音楽が楽譜とともに始まるのは、

無論、西洋音楽を一から学習しなければならなかったという動かしがたい事情もあるが、音楽の「進歩」の最大要因を「楽譜」に求める認識と信頼感がそのようにさせたように見える。言いかえれば「楽譜」は音楽における近代の象徴ではなかったか。そう思わせるものが明治年間の盛んな唱歌出版活動にはある。

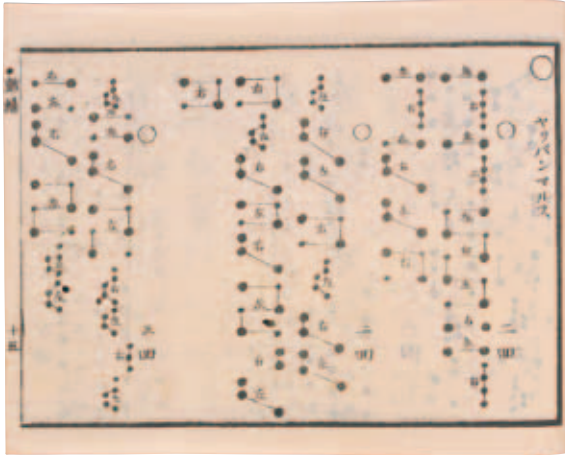
3. 明治の音楽と楽譜出版

幕末維新期に刊行された洋楽楽譜に「鼓譜」がある(写真3)。幕府はペリー艦隊来航の翌年嘉永7(1854)年洋式軍隊の導入を決意し、長崎に「海軍伝習所」を設けた。オランダ海軍将官を教師に招き実地に学ばせる一方、『歩操新式』(1864-65)等の教練書の翻訳にあたった。西洋軍隊は必ず楽隊を伴っていたから軍楽隊養成も必須要件である。鼓(笛)隊の譜が教練書に含まれるのも当然の成り行きであつたろう。しかしこれらの譜は日本の伝統的な太鼓の記譜を参考にしたドラム譜であり、明治人たちが憧れた「普通の譜」ではない。ここでは、日本近代が西洋諸国の脅威にさらされて始まったことと音楽が密接に結びついていることに注目しておこう。

五線記譜法による楽譜の製作は『小学唱歌集』(全3編)(写真4~5)を嚆矢とする。同書は明治12(1879)年文部省内に設置された音楽取調掛編纂による小学校用音楽教科書で、初編は明治14年11月刊行の日付をもつが、文部省の校閲を経たあと修正を施し、実際には翌年4月に出版された。第2編は明治16年、第3編は明治17年刊行である。

明治5(1872)年、近代的教育制度をめざして「学制」が定められた際、小学校の教科「唱歌」の項は「当分之ヲ欠ク」とせざるを得なかった。何を教えるのかも未だ決まらないという状況下では致し方もない。それから10年を経てようやく完成した教科書である。その間文部省は、のちに音楽取調掛長となる伊澤修二(1851-1917)らをアメリカに送り調査研究に当らせる一方、模範となるべき資料の収集に努めている。

当時収集された欧米の教科書や唱歌集が国立国会図書館に保存されている。いわゆる「文部省買入楽譜」と呼ばれているもので、東京書籍館設立(1875年)にともなう文部省より移管された(文部省交付本)。資料は『教育博物館図書目録洋書之部』(1881)や『帝国図書館洋書目録』(1899)に収録されており、原本に捺された印から確認できる。最新の調査によれば²、明治8(1875)年から明治20(1887)年までの5次にわたる文部省交付本中の唱歌集39タイトルに、『小学唱歌集』以降続々と登場する唱歌集に収録された楽曲の原曲が多く見られる。収集の効果は絶大だったといえるだろう。写真6~7は明治8年交付本のうちのひとつ *The Young Singer* (Cincinnati, 1860)³で、その第1編に収められた“Spring Song”の旋律形は『小学唱歌集第二編』の「霞か雲か」に転用されている(写真5)。伊澤修二が音楽取調掛の設置にあたり文部省に提出した起案書では、唱歌集の編纂は「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ルコト」を旨としたが、この段階では収録曲のほとんどを既成の西洋楽曲に頼り、それに徳育にふさわしい日本語の歌詞を付すことで折り合いをつけなければならなかった。明治8



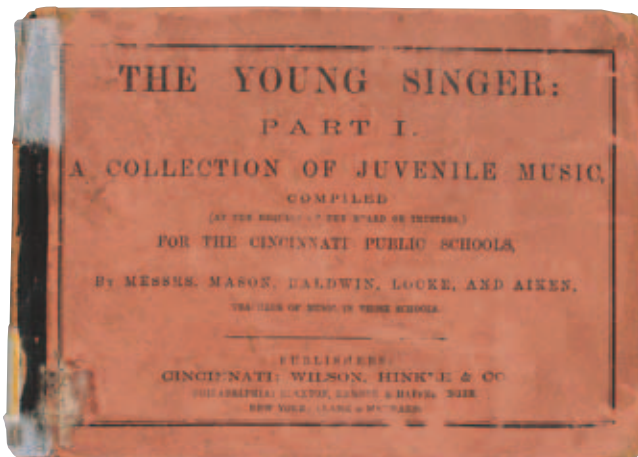
3



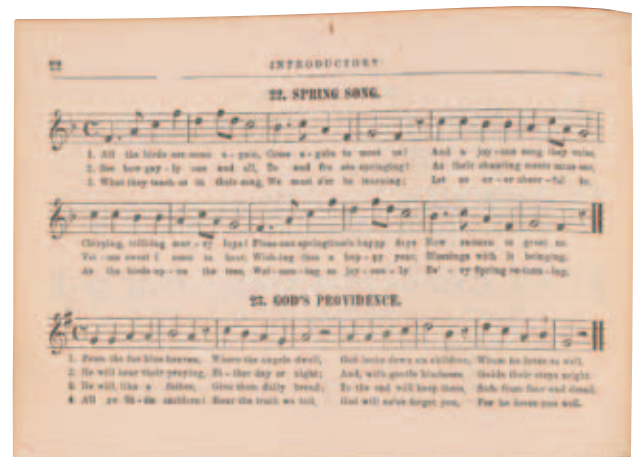
4



5



6



7

写真3 『歩操新式』第5巻「鼓譜」犬飼清信著 求實館 慶応元（1865）年1冊 11×16cm <請求記号 W352-15>
写真3は「ヤッパンマルス」が掲載されている第5巻15丁右。

写真4 『小学唱歌集』初編-第二編 文部省音楽取調掛編 [東京] 文部省 明治14（1881）年-明治16（1883）年 2冊 13×18cm
写真5 <請求記号 767.7-M753s>
写真4 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992051>（白黒） 1コマ目

写真5 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992052>（白黒） 5コマ目
写真4は初編、写真5は第二編。

写真6 *The young singer. Part I, A collection of juvenile music / compiled ... for the Cincinnati public schools, by Messrs. Mason, Baldwin, Locke, and Aiken ... Cincinnati : Wilson, Hinkle, [1860] vi, 7-192 p. ; 13×18cm <請求記号 7-164>*
写真7
写真6は表紙、写真7は“Spring Song”が掲載されている22ページ。



8



9



10



11



12



13

写真8 『家庭唱歌』第一集 四電訥治 撰曲 岡村増太郎 編述 東京 普及舎 明治20(1887)年 27p 15×20cm <請求記号 特53-857>

写真8 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855087> (白黒) 4コマ目

写真8は5ページ。

写真9 *Kohana san* / written by lieutenant F.M. Bostwick, U.S. Navy, and sung to the air of "Ballyhooly." Tokyo : T. Hasegawa, 1892. 1 v. ; 20 cm. <請求記号 W174-B1>

写真9 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1899747> (カラー) 1コマ目

写真9は表紙。

写真10 『箏曲集』文部省音楽取調掛編 [東京] 文部省編集局 明治21(1888)年 37, 12 P 26cm <請求記号 16-41>

写真10 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/857651> (白黒) 18コマ目

写真11 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/857651> (白黒) 22コマ目

写真10は表紙2種(和文、英文)のうち楽譜で始まる部分の英文表紙(左開き)、

写真11は楽譜の最初のページ。

写真12 *Japanisches populäres Lied für Gesang mit Shamisen-Begleitung. Eigentum der Kaiserlich Japanischen Marine Musikanstalt. / aus dem Japanischen in's Europäische übertragen von M. Yoshimoto.* Tokyo : Toyodo, 1890. 1 v. ; 26 cm. <請求記号 YDM108443> (マイクロフィルム)

写真12は、Okinoshiraho (沖之白帆)の表紙。

写真13 『新撰箏曲全集』第一集 黒田米太郎、菊田歌雄 著 大阪 大阪開成館 明治42(1909)年 [53]p 31cm <請求記号 特67-112>

写真13 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/857638> (白黒) 3コマ目

写真13は表紙。

年交付本の入手経緯については、初代文部大臣森有礼（1847-89）が少弁務使として滞米中に収集し、明治6（1873）年7月帰国の際に持ち帰ったとする説が有力である⁴。

『小学唱歌集』は文部省の刊行物として格調高く編纂され、記譜は既述の通り五線譜（本譜）である。五線譜とともに導入された数字譜（略譜とよばれた）が唱歌集に現われる最初は、明治20（1887）年刊行の^{しかまつし}四竈訥治編『家庭唱歌第一編』であろう（写真8）。四竈訥治（1854-1928）は仙台藩出身で音楽取調掛に学んだ。日本最初の音楽専門誌『音楽雑誌』を創刊したジャーナリストでもある。『家庭唱歌』の数字譜は本譜とは別に掲載されているが、まもなく五線譜の下に数字譜を併記することが一般的になった。

当初は西洋楽曲に頼る一方だった唱歌も明治20年代に入ると、宮内省式部職雅楽課（部）の楽師や音楽取調掛卒業生らが作曲をてがけるようになり、その作品を収録した唱歌集も現われてくるが、日清戦争を契機とする軍歌の需要はそれに拍車をかけた。ちなみに昭和の戦争期によく使われた軍歌の多くは明治生まれである。明治18（1885）年の「抜刀隊」（ルルー Charles Leroux, 1851-1926）を筆頭に、「来れや来れ」（伊澤修二）、「敵は幾万」（小山作之助 1864-1927）、「元寇」（永井建子^{けんし} 1865-1940）は明治20年代、瀬戸口藤吉（1868-1941）の「軍艦行進曲」は明治30年代の作である。

当時の唱歌や軍歌の作曲はメロディを作ることには止まっていたから伴奏はない。伴奏付の曲集の出現は明治33（1900）年、瀧廉太郎の『四季』（「花」所収）まで待たなければならない。そうした中で、明治23（1890）年長谷川武次郎⁵によって刊行されたピアノ伴奏付の英

語歌曲「Oyuchasan（オユチヤサン）」（4頁写真1～2）は異彩を放っている。歌詞はアメリカ海軍士官ボストウィック（Frank M. Bostwick, 1857-1945）の作、当時アメリカの学生たちの間で流行していた“Rosalie”（Launce Knight 編）の曲に合わせて歌う替歌である。ボストウィックは駐在中、芸妓と馴染みになったようで、歌詞はその優雅な愛らしさをうたう。プッチーニの「蝶々夫人」（1904年初演）を思わず連想してしまう。明治25（1892）年に再版、翌年には重刷もされているが、他の縮緬本と同様、外国（人）向の出版物とあって国内にどれほどの反響を引き起こしたかは不明である⁶。

明治21（1888）年、東京音楽学校（旧文部省音楽取調掛）は箏曲を五線譜化した『箏曲集』（写真10～11）を上梓し、日本音楽を「普通の譜」を通して世界に発信することを試みた。邦楽の採譜は以降、田中正平（1862-1945）や田邊尚雄（1883-1984）らによって進められ、日本音楽研究上重要な事蹟となるが、その応用編とでもいうべき「和洋折衷」の試みも現われる。明治23（1890）年、海軍軍楽隊から刊行されたシリーズ *Japanisches populäres Lied für Gesang mit Shamisen-Begleitung*（8冊）（写真12）がそれである。一等軍楽手吉本光蔵（のち軍楽長、1863-1907）の採譜編曲によるもので、歌のパートに歌詞の記載はなく洋楽器での演奏が想定されているようだ。日本音楽をこのようにして「改良」する方法は、大正期に至るまで盛んに採用され、多くは「ヴァイオリン音譜」として刊行された。「調和楽」ともよばれて、長唄や箏曲の洋楽器独奏あるいは邦楽器との合奏の流行を引き起こした（写真13）。

4. 大正モダニズムと楽譜

明治期の楽譜には西洋音楽の「土着化」へのたゆみない努力の跡が歴然としている。明治42（1909）年にはベートーヴェンのピアノソナタ「月光」も刊行され、楽譜の種類もほぼ出揃ったように見える。ただし、室内楽や管弦楽といった規模の大きな音楽の譜はまだ刊行されていない。スコアの出版は大正2（1913）年、高折周一（?-1919）が「さくら」を管弦楽に編曲した「チェリー（Cherry Blossom）」（音楽社）（写真14～15）が最初であろうか。高折は東京音楽学校でヴァイオリンを学び、明治33年卒業。雑誌『音楽之友』（楽友社）を創刊したことで知られ、明治38（1905）年に渡米。妻寿美子（1886-1961）は日本人ではじめてメトロポリタン歌劇場に出演し、「マダム・スミコ」の名で知られた声楽家である。高折は滞米中、妻のステージ用に日本楽曲の訳詞や編曲を手がけており、これもそのひとつ。21小節3頁のオーケストラ曲である。発行所音楽社は雑誌『音楽界』の刊行元でもあり楽譜出版に熱心だった。編集部にも、のちセノオ音楽出版社を設立する妹尾幸次郎（幸陽、1891-1961）がおり、大正4年創業の際、同社から瀬戸口藤吉「軍艦行進曲」（写真16）をはじめ幾つかの作品の著作権を譲り受けている。

大正期の音楽は、ベルリン留学を終えて帰国した山田耕筰を中心として展開された。彼の活動は、創作、演奏（指揮、ピアノ）、評論に加えて、交響楽団の結成やオペラ上演などのプロデュースにもおよび、文字通り八面六臂の活躍とわいていい。その周囲には、明治の終りから人気を博するようになったお伽歌劇や浅草オペ

ラを頂点とするオペラ・オペレッタの流行（写真17）、同世代の作曲家たちによる歌曲の創作、『赤い鳥』創刊に始まる童謡運動など多彩な音楽シーンが展開されている。音楽は青年たちを中心とする支持層を得て、一方では教育から芸術へ、他方で娯楽へと一挙に広がりを見せる。「大正モダニズム」とよばれた時代であり、音楽も楽譜出版もそれにふさわしい貌を見せる。楽譜にも装幀に粋をこらした美本が登場している。セノオ楽譜の竹久夢二（1884-1934）、中山晋平（1887-1952）や弘田龍太郎（1892-1952）らの童謡集を装幀した加藤まさを（1897-1977）、岡本帰一（1888-1930）などが有名だ。1910年代のベルリンで前衛的な芸術運動にも触れた山田耕筰の交友サークルには新劇の小山内薫（1881-1928）、村山知義（1901-77）、美術の斎藤佳三（1887-1955）、恩地孝四郎（1891-1955）など「新興芸術」の旗手たちが加わっていたから、彼の出版譜にもそれが反映している。セノオから刊行されたシリーズ「セノオ・ヤマダ楽譜」の恩地孝四郎のデザインも斬新だが、関東大震災で亡くなった久米民十郎（1893-1923）の装幀した『指鬢外道＜夢の歌＞』（1917）はとびきり贅沢だ（写真18～19）。管弦楽自筆スコアの写真製版、表紙はカンヴァス布という造本である。原譜の写真製版も珍しいが管弦楽スコアの出版自体、それまで『チェリー』に続くものは現われていない。山田耕筰はこの頃までに、日本人による最初の交響曲「交響曲へ長調＜かちどきと平和＞」（1912）をはじめ数曲の管弦楽作品をもち、いずれも自身の指揮により初演されているが、生前この作品以外の管弦楽スコアが刊行されることはなかった。

大正期の音楽の広がりによってレコードが果たした



14



15



16



17

写真14～15
 『チェリー』高折周一編 東京 音楽社 大正2(1913)年
 1冊 33cm <請求記号 特117-25>
 写真14 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/923934>
 (白黒) 1コマ目
 写真15 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/923934>
 (白黒) 3コマ目
 写真14は表紙、写真15は管弦楽スコアの部分。

写真16
 『軍艦行進曲』瀬戸口藤吉作曲 東京 音楽社 明治43
 (1910)年 1冊 36cm <請求記号 特54-364>
 写真16 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855207>
 (白黒) 1コマ目
 写真16は表紙。

写真17
 『うかれ達磨 歌遊び』吉丸一昌作歌 本居長世作曲
 東京 敬文館 大正2(1913)年 17p 39cm
 <請求記号 特117-37>
 写真17 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/923950>
 (白黒) 1コマ目
 写真17は表紙。



18



19

写真18～19
 『指鬘外道 夢の歌』伊藤白蓮作歌 山田耕作作曲
 東京 女子学習院常磐会 大正9(1920)年 1冊
 36cm <請求記号 特117-161>
 写真18 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1086915>
 (白黒) 1コマ目 館内限定公開
 写真19 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1086915>
 (白黒) 2コマ目 館内限定公開
 写真18は表紙、写真19は標題紙。



20



21



22



23

写真20~21

『平圓盤樂譜』第二編(長唄筑摩川) 佐々紅華編 東京日本蓄音器會 大正元(1912)年 1冊 32cm <請求記号 特270-462>

写真20 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/925295> (白黒) 1コマ目

写真21 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/925295> (白黒) 3コマ目

写真20は表紙、写真21は楽譜部分。

写真22

『ポケット ジャズ アルバム』vol.1 東京音楽書院編輯部編 東京 東京音楽書院 昭和11(1936)年 157p 19cm <請求記号 特270-98>

写真22 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1121186> (白黒) 1コマ目 館内限定公開

写真22は表紙。

写真23

『世界音楽全集』第七巻 東京 春秋社 昭和4(1929)年 262p 28cm <請求記号 83-441>

写真23 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1077998> (白黒) 3コマ目 館内限定公開

写真23は標題紙。

写真24

『愛国唱歌』第一集 佐佐木信綱 [ほか] 共編 東京 大日本雄弁会講談社 昭和13(1938)年 57p 27cm <請求記号 特270-215>

写真24 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1121294> (白黒) 2コマ目 館内限定公開

写真24は標題紙。

写真25

『楽譜国民の歌』再版 東京 大政翼賛會 昭和18(1943)年 122p 18cm <請求記号 767.6-Ta24ウ>

写真25 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1125413> (白黒) 2コマ目 館内限定公開

写真25は表紙。



24



25

役割は圧倒的である。明治後半に登場した「平円盤（レコード）」は従来の円筒型蠟管とは比較にならないほど普及したが、当初の売れ筋はやはり長唄、義太夫、浪花節で洋楽・唱歌の類は目立たない⁷。長唄などの当代名手のレコード録音は日本音楽研究の領域でも効果を発揮し、レコードと並行して「平円盤楽譜」なども刊行されている（写真20～21）。しかし、大正3（1914）年3月、松井須磨子（1886-1919）が芸術座公演「復活」（トルストイ原作）のなかで歌った「カチューシャの唄」は、5月にレコードが発売され、爆発的な売れ行きを示した。芝居を見ずとも歌は流行る。今日の流行歌の原型である。レコードに便乗する形で楽譜も出版、モダンな表紙のポケット版が工夫されてこちらも驚異的に版を重ね、類書が続いた。

5. 昭和前期の音楽と楽譜

レコードによって火がついた流行歌は、昭和期には新たに登場したラジオや映画とも連動し、その人気で楽譜出版を加速させた。映画との関連でいえば「東京行進曲」（中山晋平作曲、1929）や「丘を越えて」（古賀政男作曲、1931）のように主題歌が評判をよびレコード化されるのが一般的だが、「酒は涙か溜息か」（古賀作曲、1931）のようにレコードが先にヒットして映画化されるケースもある。楽譜出版にはレコード会社も参入、ハーモニカ譜を添えて購買意欲をそそった。ジャズやダンス音楽の流行もいっそう盛んになっていたから手軽な演奏のための楽譜も多く刊行されている（写真22）。ポピュラー音楽一色にもみえる時期だが、他方で『世界

音楽全集』（全95巻）（写真23）の刊行が開始されている。発行元は春秋社（1918年創業）で、昭和4（1929）年から7年がかりの画期的な出版である。西洋音楽の名曲は無論、日本伝統音楽、日本歌曲、唱歌、流行歌なども対象とされ、当時の名曲レパートリーとともに明治以降の日本の楽曲が一望できる。春秋社は翌年『山田耕作全集』の刊行も開始して学術的出版をめざし、昭和11（1936）年には江文也^{こうぶんや}（1910-83）の管弦楽曲「台湾の舞曲」（スコア）も刊行している。

昭和5（1930）年4月、山田耕筰に次ぐ若い世代の作曲家たちによって結成された新興作曲家聯盟（現日本現代音楽協会）は、「模倣時代より創造時代への行進曲」をスローガンに掲げた。大正期までの歌中心の作曲から進んで、より本格的な創作を目指した彼らの運動は昭和前期の音楽を象徴的に示している。聯盟のもとに集った作曲家たちには橋本國彦（1904-49）、清瀬保二（1900-81）、諸井三郎（1903-77）らがあり、同時代の欧米の音楽動向を視野に入れつつ創作が進められた。結成当初より雑誌『音楽世界』（1929年創刊）が支援し、同誌附録楽譜を作曲家たちの発表の場として提供している。彼らの創作活動に刺戟を与えた出版に、10年より龍吟社音楽事務所から刊行が開始された「チェレプニン・エディション」がある。前年に日本を訪れたロシア生れの作曲家A.チェレプニン（Alexander N. Tcherepnin, 1899-1977）は西欧の音楽技法を学ぶことに懸命であった日本の若き作曲家たちに民族的音楽語法の重視を示唆し、「チェレプニン賞」を設けるとともに楽譜出版を計画した。伊福部昭（1914-2006）のチェレプニン賞受賞作「日本狂

詩曲」スコア（1937）、1939年度国際現代音楽協会（International Society for Contemporary Music, ISCM）入選作となった小船幸次郎（1907-82）の「絃楽四重奏曲」スコアとパート譜（1937）のほか、江文也、清瀬保二らのピアノ曲、歌曲など30曲余が出版されている。管弦楽スコアの刊行は費用が高む上に一般の売れ行きは期待できないからやはり特例である。昭和15（1940）年の「紀元2600年奉祝」の際に委嘱したR.シュトラウス（Richard Strauss, 1864-1949）の「大日本帝国紀元2600年祝典音楽」をはじめとする4曲の豪華本、翌年国際文化振興会から外国向けに刊行された *Orchestral Works by Contemporary Japanese Composers* おたかひさただ（尾高尚忠「日本組曲」、早坂文雄「古代の舞曲」ほか）のように資金の潤沢な国家的事業の一環としてでなければ難しかったであろう。

太平洋戦争に突入してからの出版に見るべきものは少ない。「音楽は軍需品なり」（海軍大佐平出英夫）の標語のもとで、戦意昂揚のための愛国歌や軍歌が主流を占める（12頁 写真24～25）。

【著者プロフィール】

りん しゆく き
林 淑 姫

東京生れ。早稲田大学第一文学部（露文学専修）卒。図書館短期大学別科修了。

旧日本近代音楽財団

日本近代音楽館主任

司書、事務局長。2005年より明治学院大学大学院非常勤講師（日本近代音楽史担当）。この間、同大学院客員教授を務める。

編著に、秋山邦晴著『昭和の作曲家たち』（みすず書房 2003）、『近代日本芸能年表』（共著 ゆまに書房 2013）ほか。



註

1. 末松謙澄「歌楽論」は『東京日日新聞』明治17年9月10日より翌年2月3日まで掲載。引用は17年9月10日掲載分。（『新日本古典文学大系明治編11・教科書 啓蒙文集』（岩波書店 2006）所収）
2. 長谷川由美子『『文部省買入楽譜』と明治期出版唱歌集における西洋曲』『音楽学』第57巻1号（2011.10）長谷川氏には例示曲の選定についてもお世話になった。謝意を表します。
3. 編者の1人はL.W.メーソン（Luther Whiting Mason, 1818-96）である。メーソンは明治13（1880）年、文部省の招きにより来日、音楽取調掛の指導にあたった。
4. 橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』 風間書房 2010
5. 長谷川武次郎（1853-1938）と出版については、大塚奈奈絵「テラコヤ（寺子屋）「日本」を発信した長谷川武次郎の出版」『国立国会図書館月報』604/605（2011年7/8月）号に詳しい。参照されたい。
6. 明治25（1892）年には同じポストウィック作詞による『Kohana san（小花三）』（8頁 写真9）も刊行されている。「ゲイシャ」を歌ったこれらの楽譜は外国人の間でかなり評判だったようだ。倉田喜弘氏は「芸者が歌となって大海原を越えた」と言われる。（『海外公演事始』東京書籍 1994）
7. 倉田喜弘『日本レコード文化史』 岩波書店 2006（岩波現代文庫）

音と映像の記録を伝えるために

東京本館音楽・映像資料室では、アナログレコードやCD、DVD、VHS等の様々な媒体の録音・映像資料を利用することができます。

取り扱う資料の内容も様々です。録音資料には、音楽だけでなく、朗読や落語、演説といった音声記録も含まれます。映像資料も映画やアニメ、ドキュメンタリー、音楽や舞台の公演など多岐にわたります。毎日資料に接していると、普段店頭で目にするものは、出版されたもののごく一部なのだと感じます。

録音・映像資料は、紙媒体の資料と比べて、破損や劣化などの危険性が高く、また修復が困難という性質を持っています。そのため、利用の際にはいくつかの特徴があります。まず、利用は調査・研究目的の場合に限られます。そして、視聴ブースから離れたところに設置してある再生機器に資料をセットするのは職員です。利用者には、資料の受渡カウンターでケースと歌詞カード・解説のみをお渡しするので、時々、「CDが入っていない？」と戸惑う方もいらっしゃいます。利用者は視聴ブースからタッチパネルを通じて遠隔操作で資料を再生します。

また、昭和30年代まで主に流通していたSPレコードの中には、古いため状態の悪いものがあります。そのため、盤面のクリーニングとスリーブの交換（レコードを収納する袋を中性紙



のものに取り替える作業）を行っています。天然樹脂で作られているSPレコードは重くて割れやすいので、緊張しながらの作業です。

再生装置がなければ内容が全く分からないというのも録音・映像資料の特徴のひとつです。時代とともに様々なメディアが開発されてきましたが、中にはレーザーディスクのように、情報を記録したメディアも再生機器も生産中止となってしまったものがあります。せっかく資料を良い状態で保存していても、再生できる機器がなくなってしまうと、中にどんな「音」や「映像」が記録されていたのか分からなくなってしまいます。その対策として、内容をデジタル化して保存することが検討されています。

このように、録音・映像資料の利用と保存に当たっては、紙媒体の資料とは異なる特徴がいくつもあります。音と映像の記録を後世に伝えるために、音楽・映像資料室では様々な課題に取り組んでいます。

(音楽映像資料課資料係 100年後もききたい)



新しい統合検索サービス

ひなぎく

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ



トップページ (URL <http://kn.ndl.go.jp>)

国立国会図書館は、平成25年3月7日に、東日本大震災に関するデジタルデータや、関連する文献情報を一元的に検索できる「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）」を公開しました (<http://kn.ndl.go.jp>)。このシステムは、総務省情報流通行政局情報流通振興課と共同で開発したものです。東日本大震災に関するあらゆる記録・

教訓を次の世代へ伝え、被災地の復旧・復興事業、今後の防災・減災対策に役立つ音声・動画、写真、ウェブ情報等を包括的に検索することができます。

関係機関と連携、協力しながら、国全体として震災の記録を収集・保存・公開することを目指し、愛称を「ひなぎく」(HINAGIKU :

Hybrid Infrastructure for National Archive of the Great East Japan Earthquake and Innovative Knowledge Utilization

Hybrid Infrastructure for National Archive of the Great East Japan Earthquake and Innovative Knowledge Utilization) と名付けました。ひなぎくの花言葉である「未来」「希望」「あなたと同じ気持ちです」に、復興支援という事業の趣旨が込められています。

1 何を探せるか

国立国会図書館は、納本制度に基づき、図書、雑誌・新聞、CD・DVDなど、国内の出版物を広く収集しています。これら収集した出版物等を利用目的に即して探し出せるよう、目録データを作成し、インターネットを通じて提供しています。雑誌に収録された論文・記事については「雑誌記事索引」を作成し、タイトル、著者、キーワード等から検索できるようにしています。ひなぎくは、これらの目録および索引のうち、タイトル等に震災に関係する単語や分類を含むデータをあらかじめ抽出し、検索できるようにしています。

また、国立国会図書館は、蔵書のデジタル化を進め、利用による原本の劣化を防止するとともに、よりよい電子図書館サービスの構築を目指しています。平成22年には国等の公的機関が発信するインターネット情報の本格的な収集を開始しました。これらのデジタルデータについても、震災に関するものをあらかじめ抽出しており、ひなぎくで

検索することができます。抽出されたインターネット情報の中には、震災直後に収集した東北地方の地方公共団体等のウェブサイトが含まれます。

さらに、インターネット上で提供される震災関係の目録データベースやデジタルコンテンツが充実してきています。ひなぎくは、情報の種類や所蔵機関を意識することなく、多様な内容・形態の震災関係の情報・文献を一度の検索で探すことができます。

2 どのように探せるか

膨大な情報・文献の中から必要なものを迅速に見つけるための、ひなぎくの工夫をご紹介します。

■ デジタルコンテンツの視聴

音声・動画、写真といったデジタルコンテンツをひなぎくで視聴することができます。契約条件や技術条件によりひなぎくで視聴できない場合は、コンテンツの提供元を案内します。

■ 地図情報検索表示およびタイムライン表示

検索結果の情報が緯度経度等の空間情報を有している場合には、それらを地図上に配置することができます。また、日付についての情報を有している場合には、タイムライン上に配置し、時系列で検索結果を確認できます。

■ カテゴリー検索

ディレクトリ形式に分類された検索項目（資料



種別、場所、日付、提供元等) をクリックすることで検索を実行できます。

■再検索・絞り込み機能

検索結果の一覧とともに、検索結果をさらに絞り込むための手がかり(資料種別、場所、日付、提供元等)を表示します。

■検索結果を活用するための機能

Twitter、はてなブックマーク等外部サービスへの投稿機能、特定のキーワードによる検索結果をRSS配信する機能等、検索結果を活用するための機能を備えています。

■多言語対応・翻訳機能

ひなぎくは、日本語と英語、中国語、韓国語の翻訳検索・翻訳表示機能を備えています。

■パーソナライズ機能

パーソナライズ設定画面で、データベース、検索結果表示件数、文字サイズ等の個人設定を保存することができます。ログインした状態で保存すると、次回ログイン時にも同じ設定で利用できます。ログインしていない状態でも、Cookieとして保存し、同じブラウザから再度アクセスした際に同じ設定で利用できます。

■ログイン機能の一元化

ひなぎくにログインをすれば、国立国会図書館のサービスであるNDLサーチのパーソナライズ機能を利用したり、NDL-OPACでの資料複写の申し込みを行ったりすることができます。

■スマートフォン、タブレットへの対応

レスポンスWebデザイン¹に対応し、スマートフォン、タブレットからのご利用になれます。

■外部提供API

アーカイブ間の機械的な連携を進めるため、SRU、OpenSearch、OAI-PMHの3つの外部提供APIを用意しました²。外部提供APIを利用することで、ひなぎく内に保存されたコンテンツと、再配布の許諾を得た各連携データベースのメタデータとを検索することができます。

3 今後の展開

検索対象を今後も順次拡大する予定です。ひなぎくは、国立国会図書館がこれまで蓄積してきた情報を最大限に活用し、全国の機関等が保有する震災関係の記録への入り口となることを目指しています。ぜひご利用ください。

(電子情報部電子情報サービス課

次世代システム開発研究室)

1 デバイスごとに複数のデザインを用意するのではなく、ブラウザのウィンドウサイズに合わせてデザインをフレキシブルに調整する制作手法。

2 OAI-PMH: 特定のアプリケーションに依存せずに、メタデータを収集するためのプロトコル。

SRU: URL形式で検索要求を受け付け、XML形式で詳細なメタデータを出力するAPI。

OpenSearch: URL形式で検索要求を受け付け、RSS形式でメタデータを出力するAPI。ひなぎくでは、SRUに比べて返戻される情報は少ないが、簡素な入力で使用ことができ、応答も速い。

ひなぎくの使い方



① 国立国会図書館トップページから「NDL 東日本大震災アーカイブ」にアクセス。



② 調べたいキーワードを入力。



③ 検索結果の表示。地図上や時系列上にも表示されます。



④ 報告書、写真、動画などがご覧になれます。(一部は目録情報のみ)



東日本大震災アーカイブ公開記念シンポジウム

東日本大震災の記録を のこす意志、つたえる努力

平成25年3月26日、国立国会図書館は、東京本館で東日本大震災アーカイブの公開を記念して、シンポジウム「東日本大震災の記録をのこす意志、つたえる努力」を総務省と共に開催しました。このシンポジウムの様子は、関西館へのテレビ中継とインターネットで同時中継され、東京本館と関西館両会場を合わせて約230名の聴衆が参加しました。本稿ではこのシンポジウムの概略をご紹介します。

1 基調講演「記憶の刻印と風化」 記憶の風化を乗り越えるためには

シンポジウムでは、まず、山折哲雄氏(宗教学者)が、基調講演「記憶の刻印と風化」を行いました。山折氏は、いかなる記憶も、それに基づくいかなる記録も必ずこの世の定めで風化する、風化しないものは1つもないという観点から、真の情報、風化させない未来へのメッセージとは何かについて以下のように論じました。

ベルリンでは、
かつてのユダヤ
人居住地の歩道



山折 哲雄氏

の上に50cmおきに頭が突き出るように太い釘が打ち込まれ、注意しないと釘を踏んでしまうようになっています。人間の体に痛みを与えることで記憶の風化を押しとどめようとする、激しい情熱、意志がこめられています。それに比較して広島、沖縄、そして東北の状況はどうでしょうか。

国が現在取り組んでいる防災、減災の施策は重要ですが、それは我々が現在置かれている状況の不安を救うための安心安全であり、それは将来起こるであろう災害に対する不安への安心安全、未来の安心安全につながっているのでしょうか。未来に残すべき重要な情報を考えた時、日本人の祖先が考えた2つのメッセージが思い起こされます。

寺田寅彦が言ったといわれる「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉は、災害の記憶はいくら刻印しても必ず風化する、ということを示唆しています。このメッセージを風化させないで、後世に伝えていくためには、災害列島の日本で、不安と恐怖の中に生き続けた祖先の死生観、自然観、世界観を学び、我がものにするしかありません。それこそが、未来の安心安全につながります。

もう1つの言葉は「備えあれば憂いなし」です。今国家を挙げて行っている防災、減災の努力はまさに備えです。その備えをしっかりとやっていけば、憂いがないとは言っていますが、安心安全とは言っていません。憂いがない心の状態とは安心安全の上に安座していることです。「人事を尽く

Hybrid Infrastructure for National Archive of the Great East Japan Earthquake and Innovative Knowledge Utilization

して天命を待つ」と言えます。その人間的状況もまた日本人の伝統的の死生観、自然観、世界観、価値観と分かちがたく結び合っています。

日本は何万年も災害列島でした。ひとたび地震が発生すれば、自分または肉親が死ぬという不安な生存条件の中で生き、その経験を蓄積してきました。その体験は決して風化せず、五臓六腑にしみこむ形で我々の体に刻印され続けてきました。ドイツの釘と同様、日本は、地震列島そのものが風土の刃で我々にいかに生きるかの指針を与えてくれていたのです。地震という災害は、人間の存在それ自体を根底から脅かす性格を持っているために、本来宗教的性格を持っており、何百年間、その地震災害と付き合い続けてきた日本人は、地震を通して宗教的情操を養ってきたのです。

2 国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）の紹介

次に、「東日本大震災アーカイブの構築趣旨とシステムの紹介」として、総務省（情報流通行政局情報流通振興課長 高橋文昭氏）、国立国会図書館（電子情報部電子情報サービス課次世代システム開発研究室長 河合美穂）が発表を行いました。

東日本大震災発生後、政府は東日本大震災復興構想会議「復興構想7原則」や東日本大震災復興対策本部「東日本大震災からの復興の基本方針」

を決定しました。これを受けて、総務省と国立国会図書館は共同で「東日本大震災アーカイブ」基盤構築プロジェクトを始めました。プロジェクトには以下の3つの取り組みがあります。

1つ目がポータルサイト「ひなぎく」の構築です。「ひなぎく」で検索すると、写真やその撮影地点を地図上に表示することができます。

2つ目が「運用モデル実証」です。被災地4県5か所において、各地域の特性を考えたデジタルアーカイブを作り、これらを「ひなぎく」に繋ぎ、「ひなぎく」から一元的に検索ができるようにする仕組みの実証試験を行いました。

3つ目が実証実験を通じて、デジタルアーカイブの構築と運用のガイドラインを作っていくことです。総務省は、実証実験の結果から知り得た情報を、①被災資料の応急処置・修復・保存、デジタル化、メタデータの利用および権利処理の際に留意すべき点、②長期保存の方法とシステムの構築運用の留意点、そして③システム構築・運用に当たっての留意点等としてまとめ、公開します*。

3月7日、システムは無事に運用を開始し、平成25年4月以降、国立国会図書館が「ひなぎく」を運用しています。震災の発生から2年以上が経過し、震災に関連する貴重な資料や情報の散逸が

* 平成25年6月現在、「震災関連デジタルアーカイブ構築・運用のためのガイドライン（2013年3月）」として総務省ホームページ（http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/ictseisaku/ictriyou/02ryutsu02_03000114.html）に掲載されています。



危惧されています。今後も、国全体の取り組みとして、国立国会図書館はコンテンツを収集する機関やアーカイブを運用する機関に一層の協力を呼びかけ、他方、総務省は今後も利用者・参加者の増加のための働きかけを行い、互いに協力しながら事業を推進していきます。

③ 記録収集・保存等の取り組み

その後、「記録収集・保存等の事例報告」として、青竹豊氏（日本生活協同組合連合会渉外広報本部長／執行役員）、田島誠氏（国際協力NGOセンター震災タスクフォースチーフコーディネーター）、田中洋史氏（長岡市立中央図書館文書資料室主任）が、所属する団体・機関の具体的な取り組みを報告しました。

（1）日本生活協同組合連合会

全国の生活協同組合による被災地支援活動として、第1に「被災者の生活再建の支援」を行いました。被災地への物資提供、組合員の安否確



青竹豊氏

認、移動販売や仮設住宅での生活支援等を行うとともに、放射線・放射性物質問題に関する学習会を開催したところ、多くの参加者がありました。

第2に「生協事業

と産地・取引先の再建支援」があります。特に宮城県内の生協への世帯加入率は約7割のため、生協の再建支援自体が被災地の生活のインフラ再建になると考えました。東北6県の生協に対して、全国からの支援を集中させたり、被災地産品の利用促進キャンペーンを展開したりしています。

第3に日本生活協同組合連合会には、全国の生協と支援に協力してくれた海外の生協、社会に対する報告として、被災地の状況等の情報を提供することが求められたため、活動の詳細をホームページ、Facebookで紹介しています。未曾有の被害をもたらした東日本大震災を風化させず、後世に伝えていくため、3月に仙台市に「東日本大震災学習・資料室」を開設しました。みやぎ生協がこの大震災に際して取り組んだこと、職員の思いや行動などを記録した、各種の映像や資料、震災関連本などを整理・展示しています。また月刊誌や支援活動の報告書を通じて情報発信もしています。



被災地復興支援の資料集
(生協)

現在も継続的に支援活動に取り組んでいます
が、特に重点を置いているのは「福島を支える」
ことと「被災地の今を知り伝える」ことです。被災
地の生協からは、大震災の情報を収集し、全国
に伝え続けるということが最大の支援であるとい
う声が寄せられています。このことは被災地支
援だけでなく、次の災害へ備える私たち一人ひと
りのためにもなるのではないのでしょうか。

(2) 国際協力NGOセンター (JANIC)

国際協力NGOセンター (JANIC) が行った記
録活動の目的は、東日本大震災における被災地支
援の経験から得た教訓と課題を後世に残し、次に
生かすことです。NPO、NGO等の被災地支援の
活動を記録する理由は、それらが①支援の最前線
で被災者の現実にも最も密接に触れる人々であり、
②防災、災害対応において、大きな役割を担うよ
うになってきているからです。NPO、NGO等の
役割が増大してい
る今日、特に、自治
体の機能も失われる
ような大規模災害の
中では、公的支援の
枠組みの外に置か
れてしまう人々を救
う重要な役割を担
っているからです。



田島 誠氏

実際、JANIC会員
団体である60以上
の国際協力NGOは
海外での経験を生か
し、早い段階から支
援を始め、多様な分
野で大規模な活動を
しました。それらの
活動の中から出てき



被災地支援活動の記録報告書
(JANIC)

た問題を記録に残す活動として、①関係者向け記
録報告書の作成、②一般向け紹介DVDの作成、
③大学生レベル向け一般図書の刊行、④福島の問題
に関心を持つ海外の市民に向けた、HP等を通
じた英語による情報発信を行いました。

記録にかかるコストに多くの資源を割ける
NGOは少なく、雑多な資料を整理するノウハウも
ありません。また、震災後に雇用された緊急救援
のために臨時に雇用された職員のほとんどが既に
組織を離れています。組織や個人に埋もれている
膨大な記録が永遠に失われる恐れがあり、3年目
に入った今年こそが記録を整理する最後のチャン
スと考えています。これを機会に皆さんがNGO、
NPOに人を派遣し、埋もれている情報を収集し整
理するお手伝いをしてほしいと思います。この時
期に、記録を収集し整理する仕組みを整備し、情
報を記録するためのノウハウを共有することが次
の災害への備えに生きるのではないのでしょうか。



(3) 長岡市立中央図書館文書資料室

長岡市立中央図書館文書資料室は、平成16年の新潟県中越地震発生に伴い、「歴史的資料の救済」と「震災関連資料の収集」を二本柱に災害対応を行いました。今回、東日本大震災発生に伴い、長岡市に東日本大震災の避難所が開設されたことから、避難所にのべ27回出向き、資料収集や写真撮影などの調査活動を実施しました。

では、なぜ長岡市で、東日本大震災の避難所アーカイブが可能だったのでしょうか。第1に、新潟県中越地震の際に、阪神・淡路大震災に関する神戸大学附属図書館などの取り組みに学びながら、災害に対応した経験を生かしたこと。第2に、避難者の負担にならないよう、避難所で発生する記録資料の収集について依頼文書を作成し、避難所の職員や避難所担当課の協力を得て、長岡市の職員が廃棄される掲示物、配布物等の文書を回収して回ったこと。そして第3に、長岡市は北越戊辰



田中 洋史氏

戦争と長岡空襲という2回の戦災によって、大切な資料を全て失ってしまったという歴史的事情があり、そのために記録を残すことの重



袋に詰められた避難所資料 (長岡市)

要性を長岡市民が共有していたことがプラスに働いたと考えられます。

集めた資料からは、例えば避難の初期、中間期、最終期それぞれにおける避難者の状況や、避難所内の業務分担等が見えてきます。

今後、収集した資料を①どのように整理していくか、②どのように保存していくか、③どのように活用していくかが、課題としてあります。まだまだ被災地には記録がたくさん残っており、それらが未来へ着実に伝えられていくことを望んでいます。

4 震災に関する記録の 収集活動のこれから

パネルディスカッションでは、津田大介氏（ジャーナリスト／メディア・アクティビスト）が司会を務め、議論を進めていきました。パネリストとしては、天野和彦氏（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任准教授）、稲垣

文彦氏（中越防災安全推進機構復興デザインセンター センター長）、稲葉洋子氏（帝塚山大学非常勤講師／前神戸大学附属図書館情報管理課長）、柴山明寛氏（東北大学災害科学国際研究所 准教授）が登壇し、各氏がそれぞれに関わった阪神・淡路大震災、新潟県中越地震および東日本大震災に関連する記録の収集・保存活動について紹介しました。

各パネリストからは東日本大震災の記録を残すことの重要性やアーカイブの役割、そして今後の展望等について多くの意見が示され、活発な議論が行われました。

アーカイブは誰のためにあるものかという司会からの問いに対し、アーカイブは被災者のためのものであり、被災者が語り、他者がそれを見て、被災者に会いに来るというように、被災者の主体性を引き出すための仕掛け、復興支援の取り組みの一環として行うことが望ましいとの指摘がありました。それに加えて、被災者のみならず、次の世代のために震災の体験を伝えていくべきであるという意見や、各地から被災地に対して提供されたサポートへの恩返しとして、全世界へ教訓を伝えていくことが望ましいという意見もありました。

また、復旧・復興の過程から生まれた様々な知恵をアーカイブし、次の大規模災害が発生した際には、これらの蓄積された情報を組み合わせて、被災からの復旧・復興のために活用できる、ナレッ



シンポジウムの様子

ジデータベースとなることが期待されるという意見がありました。さらに、アーカイブを続けていくには、産学官と地域との連携が必要であり、国立国会図書館には、これらをつなぐ拠点としての役割が期待されるという意見がありました。

最後に、今後、「活かす知恵、拡げる努力」といったテーマで、各機関の進展を報告し合いながら、「ひなぎく」を育てていくと良いというコメントがパネリストからあり、ディスカッションは終了しました。

こういった期待の声に応え、アーカイブが復興事業や防災対策等に活用されるよう、今後とも継続した取り組みをしていきたいと思えます。

当日の資料、一部の動画は、ひなぎく (<http://kn.ndl.go.jp/information/57>) に掲載しています。

（電子情報部電子情報流通課）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。ここでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

SPレコードレーベルに見る日蓄

—日本コロムビアの歴史

大西秀紀 編 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター刊
2011.3 58p 30cm <請求記号DL731-J229>

2010年、日本で最も歴史あるレコード会社が記念の節目を迎えました。遡ること約100年、1910(明治43)年に現在の日本コロムビアである株式会社日本蓄音器商会(日蓄)が設立されました。その、日蓄—日本コロムビアの歴史を振り返ることができる資料をご紹介します。

本書は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターが2011年に行った企画展示の内容をまとめたものです。展示では、日蓄および日本コロムビアの邦楽SPレコードのレーベルやレコード袋のデザインの紹介を中心とし、社史の前半50年がテーマとして取り上げられました。

本書の特色は、これまであまり注目されてこなかったレコードレーベル面とレコード袋(スリーブ)の変遷を取り上げたことです。

レーベルは日本蓄音器商会時代の1910(明治43)年頃の古いものから、SPレコード時代の最後にあたる1962(昭和37)年頃のものまで取り上げられています。その中で珍しいレーベルを紹介します。

1912(明治45)年に発売された、浪花節の吉田^{よしだ}奈良丸^{ならまる}のレコードは、通常はレーベルの真ん中にあるトレードマークのワシの絵が、奈良丸の顔写真に置き換えられています。これほどまでに当時浪花節は人気を呼び、創業期の日蓄の躍進に大きく貢献しました。吉田奈良丸は、^{きょうやまこえん}京山小円や^{とうちゅうけんくもえもん}桃中軒雲右衛門らと浪花節の黄金期を築きました。

1940(昭和15)年に販売された、松竹大船製作の映画『愛染かつら完結篇』の主題歌は、主演の田中絹代と上原謙の二人が並んでいる映画の1シーンがレーベルに印刷されています。当時は、映画の公開と併せて、このよう

な主題歌がレコードでも発売されていました。現在でも映画のサウンドトラックや主題歌がCDやインターネット配信などで発売されますが、それらの先駆けともいえるでしょう。

また、レコード袋はこれまであまり研究の対象とされてきませんでした。本書では、大仏がレコードに耳を傾けている初期のデザインから、戦後のカラー印刷の美しいデザインまで取り上げられており、各時代のデザインや印刷技術の変遷についても知ることができます。

SPレコードは第一級の音楽資料ですが、その制作や発売に関する基本的な情報を知るのがかなり難しい資料でもあります。しかしながら、タイトルや歌手名などのカタログに記された書誌事項以外に、レコードレーベルやレコード袋の外観からも、そのレコードの情報を得ることができ、貴重な情報源であるといえます。

本書に掲載された美しいレーベルを眺めてみると、明治・大正・昭和の時代が目の前に甦ってくるようです。

(利用者サービス部音楽映像資料課 ^{やまもと}山本 ^{しゅんすけ}俊亮)



韓国国立中央図書館との 第16回業務交流



5月27日～6月3日、韓国国立中央図書館（ソウル）において標記業務交流が行われ、倉橋哲朗利用者サービス部図書館資料整備課長ほか3名が、当館代表团として訪韓した。

両図書館の現況と今後の課題、「オンライン資料の収集・整理・保存」および「非図書資料の収集・整理・利用」をテーマとする報告が双方からなされ、活発な意見交換が行われた。

また、韓国の国立子ども青少年図書館と当館の国際子ども図書館の実務者が交流し、来館利用者サービス等について報告と質疑を行った。

「国立国会図書館の 資料デジタル化に係る 基本方針」の策定

平成25年5月、国立国会図書館は「国立国会図書館の資料デジタル化に係る基本方針」を策定した。これは、国立国会図書館が所蔵資料をデジタル化するに当たって、その対象資料の範囲や、デジタル化の方法等、基本的な考え方を示した文書である。

「国立国会図書館の資料デジタル化に係る基本方針」は、国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >国立国会図書館について>国立国会図書館の資料デジタル化に係る基本方針 (http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/digitization_policy.html) に掲載している。

おもな人事

<異動>

※（ ）内は前職

平成25年7月1日付け

衆議院事務局

(専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任)

矢部 明宏

専門調査員 調査及び立法考査局行政法務調査室主任

(調査及び立法考査局次長)

山口 和人

調査及び立法考査局次長、調査企画課長事務取扱

(主幹 調査及び立法考査局付、調査企画課長事務取扱)

片山 信子

法規の制定

【規則第2号】 国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則

(平成25年5月16日制定)

関西館総務課が所掌していた関西館の情報システムおよびシステム基盤の運用に関する事務を関西館電子図書館課の所掌とした。平成25年5月16日から施行された。

【規程第1号】 国立国会図書館法によるオンライン資料の記録に関する規程

【規程第2号】 国立国会図書館組織規程の一部を改正する規程

【告示第1号】 国立国会図書館法第二十五条の四第四項に規定する金額等に関する件

(いずれも平成25年5月30日制定)

国立国会図書館法の一部を改正する法律(平成24年法律第32号。以下「改正法」という)により新規に追加された国立国会図書館法(昭和23年法律第5号)第25条の4および改正法附則第2条において、館長が定めることとされている事項、すなわちオンライン資料の定義、提供の方法、提供義務の除外、補償金の決定手続、提供の免除を定め、それに伴い納本制度審議会規程(平成9年国立国会図書館規程第1号)の所要の規定を整備し(規程第1号)、また、それらの事項に関し必要な細部事項を定めた(告示第1号)。あわせて、オンライン資料の収集に関する事務を関西館および収集書誌部の所掌とするとともに、所要の規定を整備した(規程第2号)。これらの法規は、平成25年7月1日から施行された。

国立国会図書館法によるオンライン資料の記録に関する規程および国立国会図書館法第二十五条の四第四項に規定する金額等に関する件、ならびにこれらの法規による改正後の国立国会図書館組織規則(平成14年国立国会図書館規則第1号)、納本制度審議会規程および国立国会図書館組織規程(平成14年国立国会図書館規程第2号)は、国立国会図書館ホームページ>国立国会図書館について>関係法規(<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws.html>)に掲載している。



お知らせ

■ デジタル化資料の 図書館等への送信に 関する説明会

平成26年1月から、国立国会図書館では、当館がデジタル化した資料を、全国の図書館等に送信するサービスを開始する予定です。

送信の対象となるのは、当館がデジタル化した資料のうち、絶版等の理由により入手困難な資料です。

この送信サービスを利用すると、当館がデジタル化した資料の閲覧・複写を自館でも提供できるようになります。

平成25年10月から、送信サービスを利用する図書館等の募集を始めるに当たり、サービスの概要や利用方法に関する説明会を開催します。どうぞご参加ください。

○日 時 9月4日（水）14:00～15:30

○会 場 東京本館 新館講堂（定員約250名）
関西館 大会議室（定員約250名）
（東京本館、関西館両会場を相互にテレビ中継）

○対 象 デジタル化資料送信サービスの利用を希望する図書館等

○お申込方法

8月30日（金）までに、参加申込みフォームからお申し込みください。

*定員に達した時点で受付を終了します。

国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>イベント・展示会情報
>デジタル化資料の図書館等への送信に関する説明会

URL http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/digi_library.html

○お問い合わせ先

国立国会図書館 利用者サービス部 サービス企画課

電話 03（3581）2331（内線25102）



お知らせ

■ 国立国会図書館 データベースフォーラム (関西館)

「国立国会図書館データベースフォーラム」は、国立国会図書館の作成するデータベースやコンテンツの内容、最新情報、知っていると便利な使い方を、デモンストレーションや利用事例を交えながらご紹介する催しです。

フォーラム終了後には、希望者を対象に館内見学会を実施します（事前申込みが必要です）。入場は無料です。図書館関係者のもとより、ご関心をお持ちのみなさまのご参加をお待ちしています。

- 日 時 9月18日（水）【休館日】 13:00～17:00
*館内見学はフォーラム終了後17:10～（30分程度）
申込み多数の場合はご希望にそえないことがあります。
- 会 場 関西館 大会議室
- 定 員 300名（館内見学は80名）※先着順
- お申込方法 ホームページ上の「データベースフォーラム参加申込みページ」からお申し込みください。7月31日（水）から受付を開始します。
国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）
>イベント・展示会情報>国立国会図書館データベースフォーラム
URL <http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/dbf2013.html>

- お問い合わせ先
国立国会図書館 関西館 総務課
電話 0774 (98) 1247 (直通)

※東京本館では10月16日（水）に開催を予定しています。詳細は本誌9月号でお知らせする予定です。



お知らせ

■ 平成 25 年度 「児童文学連続講座 —国際子ども図書館 所蔵資料を使って」

全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員の方を対象に、国際子ども図書館が広く収集してきた国内外の児童書および関連書を活用した児童文学連続講座を開催します。

- 総合テーマ 「英米児童文学をめぐる時代と環境」
- 総合監修 川端 有子（日本女子大学家政学部児童学科教授、日本イギリス児童文学学会会長、国立国会図書館客員調査員）
- 日 時 11月11日（月）、12日（火）
- 会 場 国際子ども図書館3階ホール
- 対 象 現在、図書館等において児童サービスに従事している方。
- 定 員 60名
1機関1名（原則として、同一市町村区内から1名）。
応募多数の場合は調整します。なお、2日間連続して受講できる方を優先します。
- 参 加 費 無料。ただし、旅費・滞在費等は受講者の負担とします。
- お申込方法 国際子ども図書館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）> 研修・交流 > 児童文学連続講座 > 講座の告知をご覧ください。
URL <http://www.kodomo.go.jp/study/chair/notice.html>
- お問い合わせ先
国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課 協力係
電話 03（3827）2053（代表）



お知らせ

■ 国際子ども図書館講演会 「那須正幹さんに聞く —ズッコケ三人組からの メッセージ—」

国際子ども図書館は、展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」の中で、那須正幹氏の作品と業績を紹介するコーナーを設けます（平成25年8月20日～平成26年2月23日）。

展示にあわせて、多くの読者に親しまれている『ズッコケ三人組』シリーズの著者である那須正幹氏を講師に迎え、今子どもたちに伝えたいものについてお話いただきます。また、講演の後、本展示会監修者の宮川健郎氏との対談を行います。

入場は無料です。この講演会は、上野の山の博物館・美術館などの文化施設が共同で開催する「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の参加行事です。

- 日 時 10月5日（土） 14:00～16:30（予定）
- 会 場 国際子ども図書館3階ホール
- プログラム 「那須正幹さんに聞く —ズッコケ三人組からのメッセージ—」
講演 「ズッコケ三人組からのメッセージ」
那須 正幹 氏（児童文学作家）
対談 「21世紀の子どもたちに手わたしたいもの」
那須 正幹 氏、宮川 健郎 氏（武蔵野大学教授、本展示会監修者）
- 対 象 中学生以上（定員100名）
- お申込方法 8月中旬頃、国際子ども図書館のホームページに掲載する予定です。

- お問い合わせ先 国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課
電話 03（3827）2053（代表）

お知らせ

■ 国際子ども図書館展示会 「世界をつなぐ子どもの本 —2012年国際アンデルセン賞・ IBBY オナーリスト受賞図書展」

国際子ども図書館では、8月22日から、国際児童図書評議会（IBBY）の日本支部である日本国際児童図書評議会（JBBY）との共催で、「世界をつなぐ子どもの本 —2012年国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展」を開催します。

この展示会では、2012年の国際アンデルセン賞受賞者のこれまでの作品と、IBBY オナーリスト（優良作品）の推薦作品およびその邦訳書、あわせて約200冊を手にとりご覧いただけます。

入場は無料です。皆様のご来場をお待ちしています。



IBBY Honour List 2012.
International Board on Books for
Young People, c2012
表紙

- 開催期間 8月22日（木）～9月29日（日）
（月曜日、国民の祝日・休日、9月18日（水）を除く）
- 開催時間 9:30～17:00
- 会場 国際子ども図書館3階ホール

国際アンデルセン賞は「小さなノーベル賞」ともいわれ、2年に1度、児童書の分野で卓越した業績をあげた現存の作家および画家に贈られます。2012年はマリア・テレサ・アンドウレルエット氏（アルゼンチン）が作家賞を、ピーター・シス氏（チェコ）が画家賞を受賞しました。

IBBY オナーリストは、IBBYの各国支部が、過去3年以内に自国で出版された児童書の中から、外国の子どもたちに紹介したい作品を選出し、隔年で作成する推薦図書のリストです。「文学作品」「イラストレーション作品」「翻訳作品」の3部門からなり、2012年は58の国と地域から169作品が選ばれました。

日本からは、イラストレーション作品部門に井上洋介氏の『ぼうし』、翻訳作品部門に斎藤倫子氏の『シカゴよりとんでもない町』が選出されています。

○お問い合わせ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課
電話 03（3827）2053（代表）

お知らせ

■ 関西館小展示（第14回） 「東南アジア世界遺産の旅」

第14回の関西館小展示では、「東南アジア世界遺産の旅」と題して、東南アジア諸国の世界遺産に関する資料を紹介します。

1972年のユネスコ総会において、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」が採択され、世界遺産リストへの登録が開始されてから、2012年で40年が経過しました。今年6月には富士山の文化遺産登録も決定し、世界遺産はますます人々の注目を集めています。

東南アジア諸国からも7か国33件が世界遺産に登録されています。また、東南アジア諸国のうち10か国で構成されるASEAN（東南アジア諸国連合）と日本との関係について見れば、今年、友好協力40周年という節目を迎えています。

この2つの40周年にちなみ、今回の展示では、東南アジア諸国の世界遺産に関する資料の中でも、20世紀中頃に撮影された写真集や旅行記、案内記を中心に、さまざまな資料を展示します。この機会に、多くの人々が魅了され、旅をしてきた東南アジア諸国に思いを馳せるとともに、ご自身の旅も思い描いてみてはいかがでしょうか。

- | | |
|-------|--|
| ○開催期間 | 8月22日（木）～ 9月21日（土）
（日曜日、国民の祝日・休日、9月18日（水）を除く） |
| ○開催時間 | 10:00～18:00 |
| ○場 所 | 関西館 総合閲覧室 |
| ○入 場 | 無料 |



『暹羅案内』
（暹羅室 1938）



『仏領印度支那写真集』
（大阪商船 1942）



『世界周遊：写真集 第2 (ソ連邦, 中近東諸国, インド, 東南アジア諸国, 中国, 朝鮮, 台湾)』
（修道社 1960）

お知らせ

■ 「戦略的目標」を策定しました

平成24年7月に、国立国会図書館は、果たすべき使命と、その使命の下でおおむね5年間にわたって取り組む6つの目標を掲げる「私たちの使命・目標2012-2016」を策定しました（本誌618（2012年9月）号 pp.24-25参照）。

これを実現するための中期的な目標として、平成25年5月に、各「目標2012-2016」に対応する「戦略的目標」を新たに策定しました。

「戦略的目標」は「私たちの使命・目標2012-2016」とともに、国立国会図書館ホームページからご覧になれます。

○国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>国立国会図書館について>「私たちの使命・目標2012-2016」及び「戦略的目標」

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/mission2012.html>

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第256号 A4 120頁

季刊 1,890円 発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-750-4)

主要立法（翻訳・解説）

- ・イギリス会計検査院の機構改革—2011年予算責任及び会計検査法（会計検査関係）—
- ・フランスのオランド政権における政府構成員職務倫理憲章
- ・ドイツにおける着床前診断の法的規制
- ・韓国におけるいじめ対策法制
- ・豪比相互訪問軍隊地位協定—冷戦後の二国間防衛協力の実務協定モデル—

お知らせ



レファレンス 749号 A4 56頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・若者の就職活動と雇用実態
- ・米国の郵政改革
- ・バス高速輸送システム (BRT)



カレントアウェアネス 316号 A4 24頁 季刊 420円 発売 日本図書館協会

- ・市政専門図書館における関東大震災関連資料構築の軌跡
 - ・歴史学研究のためのデジタル・アーカイブ—情報発見のために必要なものとは—
 - ・地方議会図書室に明日はあるか—都道府県議会図書室を例に—
- <動向レビュー>
- ・大学図書館における学生協働について—学生協働まっぶの事例から—
 - ・次世代DAISY規格と電子書籍規格EPUB3
 - ・米国および日本におけるグリーンライブラリーの事例紹介

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03 (3523) 0812

訂正

本誌627 (2013年6月)号「今月の一冊」3ページ掲載の写真3のキャプションに脱字がありました。

(誤)『豆腐百珍』には田楽と名のつく14品に……

(正)豆腐を田楽にする料理は、『豆腐百珍』には田楽と名のつく14品に……

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Harmonium-sutra : Indian music meets a Western instrument
- 04 Landscape of musical scores
Music of the Meiji, Taisho, and Showa eras
- 16 NDL Great East Japan Earthquake Archive “HINAGIKU”
NDL’s new integrated search service
- 20 The records, the will to preserve them and the effort to hand them down
to the future generations
Symposium commemorating official launch of the Great East Japan Earthquake Archive
- 15 <Tidbits of information on NDL>
To pass down sound and visual records
- 26 <Books not commercially available>
○ *SP rekōdo rēberu ni miru Nicchiku - Nihon Koronbia no rekishi*
- 27 <NDL News>
○ 16th mutual visit program with the National Library of Korea
○ Basic Policy for Digitization of National Diet Library’s Collections
○ Changes in personnel
○ Rules & regulations
- 29 <Announcements>
○ Briefing session on the transmission of NDL digitized contents to public libraries
○ NDL Database Forum in the Kansai-kan of the NDL
○ ILCL Lecture Series on Children’s Literature FY2013 - utilizing the ILCL collections
○ Lecture at the International Library of Children’s Literature: Asking Mr. Masamoto Nasu: A Message from *Zukkoke Sanningumi* (the Hilarious Trio)
○ Exhibition at the International Library of Children’s Literature: Children’s books link the World – Hans Christian Andersen Award 2012 & IBBY Honour List 2012
○ Small exhibition in the Kansai-kan (14) “Traveling around the World Heritage sites in South East Asia”
○ Strategic Goals
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 25 年 7/8 月号 (No.628/629)

発行所 国立国会図書館
編集責任者 田中久徳
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成 25 年 7 月 20 日発行 定価 525 円
(本体 500 円)

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03 (3523) 0812 (販売)
FAX 03 (3523) 0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



「舊儀裝飾十六式圖譜」から「雅樂器飾」
猪熊浅麿 著 古谷紅麟 画 京都美術協會
明治36（1903）
1帖1冊（別冊共）25×37cm
<請求記号 亥二-20>

国立国会図書館月報

平成25年7月20日発行（毎月1回20日発行）
（7/8月号通巻628/629号）

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525円（本体 500円）